

新宮町立花口区立花山の登山道の活用について

九州産業大学 学生会員 ○寺島拓宛
九州産業大学 正会員 山下三平

1. はじめに

福岡市東区に隣接する福岡県糟屋郡新宮町は、とくに北西部で多様な用途の施設が数多く建設され、市街化が進む。一方、町の南東部に位置する立花口区は人口が減少し、自然豊かな地域であるが、空き家、空き地が目立つ。立花口区は「立花山」の登山口としての役割をもち、築100年を超える古民家が現存するなど歴史的資源のある地域である。

しかしながら、地域の高齢化と後継者不足でこれらの資源を活かしきれていない。そこで本研究は、立花山の登山客の意向を踏まえ、地元との協議を行った上で、登山道の活用の方針について考察する。

2. 研究方法

(1) 対象地域について

本研究では新宮町の国道3号線の東側に位置する東部地域の立花口区を扱う(図-1)。

立花口区には立花山(367m)があり、年間約3万人の登山客が訪れている。また貴重な史跡が数多くあり、古民家が建ち並んでいる。立花口区の住民数は644人で、世帯数は263世帯である(平成27年9月末現在)¹⁾。

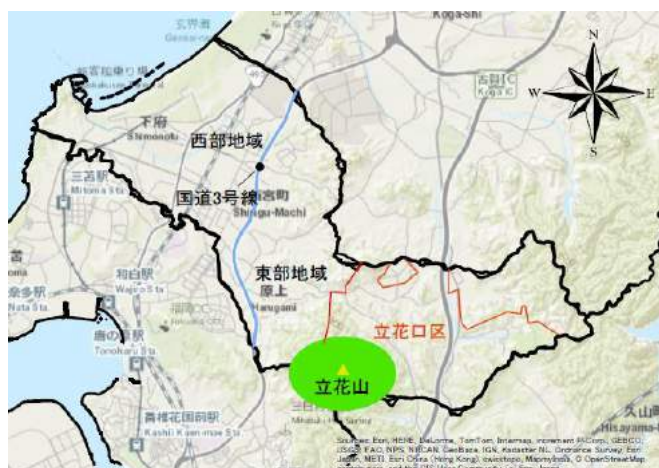


図-1 新宮町の立花口区 (ArcGIS をもとに作成)

(2) 立花山の登山客への調査

登山客が立花口区にどういった目的で来ているか、また、どの年代の人が多く、どの様な職業が多い

のかを直接聞く調査を行った。表-1は調査の対象と人数、日時、項目とその方法についてまとめたものである。

表-1 調査方法について

対象	登山客50人	
日時	11月25日(日) 10:00~14:00	
項目・方法	性別(男性, 女性)	目視
	年齢(年代)	「年齢を年代で良いので教えてください」
	どこから	「今日はどこから来られましたか?」
	ご職業	「ご職業は何をされていますか?」
	目的	「今日はこういった目的で来られましたか?」

3. 調査結果

(a) 調査対象を男女別と年代別にまとめたもの (図-2, 3)

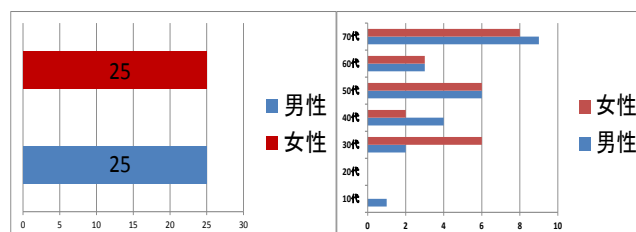


図-2 男女別の割合 図-3 男女別、年代別の割合

(b) 調査対象を市内、市外別と職業別にまとめたもの(図-4, 5)

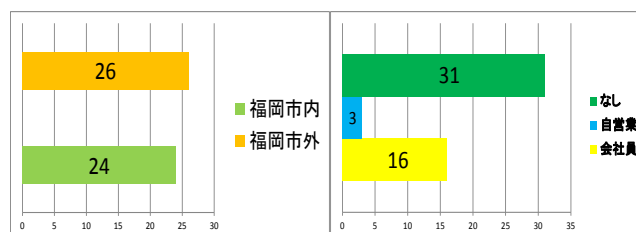


図-4 市内、市外別の割合 図-5 職業別の割合

(c) 調査対象を目的別にまとめたものと登山道の活用について興味があるのかまとめたもの (図-6, 7)

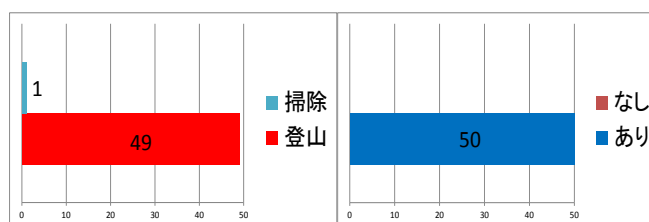


図-6 目的別の割合 図-7 登山道活用の興味の割合

登山客は男女に目立った差はなく(図-2), 年代別にみると若い年代も多くみられる(図-3)。しかし, 高齢で定年退職後に, 運動の一環として登山をする人が一番多い(図-5)。また市外から来る登山客は半数以上で(図-4), 車で来る人々のみである。現在の駐車場から立花山の登山口に行く過程に古民家は見られない。このため, 立花口区の貴重な史跡や古民家の存在はほとんど認知されていない(図-6, 7)。

4. 立花口古民家・登山道活用法検討会

年間約3万人もの登山客が立ち寄れる拠点の効果的な整備のために, 町が買い取った旧堀家の活用法を専門的に考えるための話し合いが行われている。その概要は表-2のとおりである。

表-2 検討会の日付と主な内容

日付	2018年10月23日	2018年11月20日	2018年12月18日
人数	6名	9名	11名
内容	①目的の確認 ・町の財産としての旧堀家の活用法を専門的に考える。 ・ゼロベースで地域の意見を集約するというやり方ではない ・地域の方針は既にあって年間3万人の登山客が立ち寄れる拠点の効果的な設備である ・その担い手をみだし協力をとりつけるのも大事な目標 ②これまでの研究の提案の取り組み ・旧堀家の詳細な建築調査を行った ・登山道沿いの他の物件も同様に ・建築士会等の協力のもと, 古民家実地評価の概略を行った ・立花口区に住民アンケート調査を行った ・登山道の利用者を想定した行動と評価に関する現地実験を行った ・登山道と沿道民家の活用法についていくつかの提案を行った ・立花口区の模型をいくつか作成した ③今後の進め方	①利活用に向けての基礎的要件の整理と課題検討 ・補修箇所の確認(大工を伴い, 確認作業を行う) ・建物の評価(福岡県の文化財保護担当者に派遣依頼, 地元大工を伴い, 確認作業を行う樹種の特選など) ・痕跡図の作成(利活用品の作成に参考とする) ・用途変更での法的制約と対応(排煙規制などの遵守) ※住宅から「物販」「食堂又は喫茶店」「集会場」などの用途変更が必要 ・安全性への対応(耐震への対応検討やバリアフリー化の検討) ②利活用に向けての事例調査 ・古民家を活用している事例の調査 ③活用案の作成	①施設の目的 ②利活用方針 ・立花山登山客など来訪者に向けたおもてなしの提供 ・地域資源を活用した商品の展示販売 ・観光資源の発信, 交流事業の推進 ・地域活性化の支援 ③管理方法 ・新宮おもてなし協会による指定管理 ・おもてなし協会から関係団体に対しスペースの貸出, 提供 ④改修方針 ・建物が持つ歴史的, 景観的な価値を最大限利用するため現況利用を基本とし, 公共施設として必要な安全, 衛生面での改修を行う ・その他については利活用の内容により検討する

旧堀家は築80年を越える古民家である。建築面積の合計が150㎡を上回る大きさである。特徴がある古民家は, 一方で保全し価値を維持する必要があるとともに, 他方, 積極的な活用が地元では期待されている。このため, 1) 用途を住宅から店舗に変更すること, 2) 耐震補強の必要があること, 3) 補修箇所が数多くあること, 4) 広い平面構成を保存と活用にいかに関り分けるかを定めること, などが議論されて

いる。

5. 考察

立花山の登山客への調査の結果を踏まえると, 「駐車場を広くとる」「立花口ならではのもの」「休憩ができる」という3つの点が重要である。

立花山に登山に来る人々はほとんどが車を利用し, 高齢者が大半なので, 「駐車場は広く」また「休憩ができる」という点が重要である。一方, 立花口区に来る登山客の方に登山以外の魅力を見せるため, 「立花口ならではのもの」を選定する必要もある。

「喫茶店」という案があがっている。この地区では古くからミカンづくりがさかんである。「立花口ならではのもの」として「立花ミカン」を活用したスイーツを販売することなどが考えられよう。

「喫茶店や休憩所がもしこの近くにできた場合, 興味はありますか?」と聞いたところ, 50人中全員が興味があると答えた(図-7)。「喫茶店」は立花山の登山客にとって需要のあるものと判断できる。そこで立花口区の代表的な産物を販売することで立花口区への来訪者を増やすことに繋がるだろう。

6. まとめ

本研究では, 年間3万人もの登山客が訪れる立花山の登山客を調査し, 以下について把握した。

特徴的なのは, 女性に比較的若い30代の割合が多い点である。また, 定年退職後に運動の一環として登山する割合も高い。若い女性に好まれ, かつ高齢者の運動後の休憩所になる施設の必要が示唆される。

特産のミカンを活かし, 古い建物の雰囲気大切にしたいゆとりのある空間構成で, 町が所有することになった古民家を整備することが肝要であろう。

謝辞: 本研究は新宮町からの受託研究「東部地域における地域資源活用調査」(代表者: 山下三平) による。また, 調査の資料提供を下さった立花山登山客の方々に感謝申し上げます。

<参考文献>

1) 新宮町HP(住民基本台帳)

<https://www.town.shingu.fukuoka.jp/index.cfm/59,0,270,165,html>